

審査員講評

表彰式における審査員の講評を誌面の都合上要約してご紹介します。
(環60号より抜粋)

隈 研吾

慶応義塾大学教授



今年のコンペは、ガラスの光学的 (optical) な効果をいろいろ追求して、不透明、半分だけ透明、方向によって違って見えるなど、光学的効果の更に先を提案者は求め始めたのではないかと傾向がありました。この傾向はこの10年くらい建築界の主要なテーマとしてもあげられると思います。その傾向のさらに先を予測するような作品が両方の部門ともで上位になりました。

提案部門の市川案は、いままで光学的効果からいって一番考えないと思われていた引き違い窓を使いながら新しい空間を提案。新鮮でこれはすごい、研えていて、審査員全員一致で金賞になりました。作品例部門の山下案のクリスタル・ブリックも、ガラスブロックという光学的効果があるものを使いながら、それを組織的に構造にもするという極めて大胆かつ挑戦的な作品で、まさに光学的効果の先を行っているような提案でした。

ガラスが新しい時代を迎えつつある。単にガラスに光学的効果を求めるだけでなく、建築の本質にガラスが組み入れられてくる、新しい時代の幕開けを告げるのが今回のコンペだったと思います。

佐野吉彦

安井建築設計事務所
代表取締役社長



ガラスは、透明で清潔というイメージがあります。提出作品には、それを受けて、みずみずしく美しいものが、目につきました。一方で、美しくに引きずられてしまっただけの作品が多かったようにも思います。われわれは、日常的にガラスという素材を気軽に使っていますが、逆にこれは安直に使われてしまったり素材であることを示していると思います。

近代建築の時代、ガラスはずっと建築材料の中心でした。では、これからの時代はどうかたちで生き残ってゆくことになるだろう。審査をしながらそんなことを考えていました。

受賞作品からは、ガラスの今後における可能性を少し発見できたように感じます。提案部門では、光学的な技術を超えた先にどんな世界が開かれるのかということ、新鮮な切り口で示していました。着実に技術力に裏打ちされた作品例部門では、意欲的でデリケートな成果が見られました。

今回はまた、ガラスという素材を上手に使いこなすには、センスの良さが不可欠であることを再認識できました。デリケートな視線の延長線上にこそ、ガラスの可能性は開けるのです。

手塚貴晴

武蔵工業大学助教授



このコンペが面白い理由は、日本電気硝子という会社にあると思います。ガラスをそのまま見せないで、何から面白いことをしようという、ある種の発明を仕事としているような会社なので、それだけ面白いと思います。

審査では、製品のアクの強さに負けていない、そしてガラスという材料を超えたところをみました。山下案は、従来のガラスの概念を超え、建物自体がガラスという点が面白かったです。しかも、ガラスがうるさくないというのがとても大事です。どこまでがガラスなのかわからないくらい作品と完全に融合して素晴らしい作品でした。市川案の引き違い窓は、建築作品として大事な原点があると思います。建築はある意味で技術の最後尾をいくようなところがあり、なかなか他の分野にかなわない。建築の世界にすでにあるものを使い、新しいものを作るという努力に、発展性を感じました。ADH案は、ガラスではなく、そこをぬけてくる光など付加的要素がテーマで、ガラスが脇役におさまっているが、この製品でなければできない、付かず離れずの関係があり、素晴らしい作品です。

皆さんにはこの素晴らしい作品を誇りに、ずっと大事にしていってほしいと思います。

飯島伸浩

日本電気硝子 執行役員
建材事業本部長



空間デザイン・コンペティションも今回で11回目を迎えることができました。主催者の一員として、大変ありがたくお礼を申し上げます。

提案部門は、ガラス質の生きた住まいが課題でした。入賞された作品はどれも素晴らしい、大好きです。銅賞の山形・高橋・佐藤・小林案には当社のグラスア、ペルーナのどちらが合うかな、佳作の近藤案のファイアライトの作品は、実物をぜひ見たいなど、個人的にもいろいろ楽しんでいただきました。金賞の市川案は、審査員の先生皆様が大変高い評価をされました。

作品例部門は、私どもの建材製品の中でも特にガラスブロックは素晴らしい作品が多くて大変激戦でした。金賞作品の新しい工法、銀賞作品のオプトなど、ガラスブロックの使い方に新鮮な提案をしていただきました。また、新製品のペルーナ、グラスア、アクラス、この入賞は、製品開発力を入れております弊社にとりまして、大きな支えとなります。